

袋井市一色前田遺跡

1 9 8 1

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和55年9月25日から昭和56年3月31日まで実施した袋井市宇刈地内における土砂採集により発見された一色前田（いっしまえだ）遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は、土砂採集の起因者である㈱磯部産業を委託者とし、袋井市長を受託者として袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は、永井義博（袋井市教育委員会）が担当した。
4. 本書の執筆・編集も永井が行った。
5. 本書で使用了遺物実測図・写真は永井が、遺構・遺物トレースを早川保子が、出土品の資料整理を大庭京子、白井洋子、寺田妙子、内山笑子、鈴木栄子が行った。また現地調査、出土品整理に前田庄一氏、西井幸雄氏の協力を得た。
6. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。
7. 調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 経 過 報 告	1
第2章 調 査 体 制	3
第3章 遺 跡 環 境	3
第4章 遺 構 概 説	4
第1節 丘陵上平坦面の遺構（B地区）	4
(a) 第1号住居跡	4
(b) 第2号住居跡	4
(c) 第3・4号住居跡	6
(d) その他の遺構	6
第2節 西斜面の遺構（C地区）	8
第5章 遺 物 概 説	9
第6章 まとめにかえて	18

第1章 経 過 報 告

昭和55年の夏、袋井市宇刈地内の土砂採集現場で土器が大量に出土しているとの通報が、出土した弥生土器数点とともに袋井市教育委員会に入った。現地は、袋井市遺跡地図・遺跡地名表等には登録されていない新発見の遺跡であった。教育委員会は協議の結果、さっそく吉岡伸夫を現地に派遣し、その状況を調査するとともに土砂採集を実施していた陶磁部産業に埋蔵文化財に対する取り扱いについて指導し、さらに発掘調査の必要性について説明した。この結果土砂採集は一時中断され発掘調査に全面的な協力を約束していただいた。

現地調査は吉岡が大畑遺跡の調査を担当していたため、永井義博が発掘担当者となり、地元宇刈地区の皆さんの協力を得て開始された。調査方法は調査対象地をその山の地形からA、B、Cの三地区に分け15ヶ所の試掘用トレンチを設定し遺構・遺物の分布範囲を追った。第2図のとおりA地区は山頂、東斜面、南側一帯を示し、B地区は丘陵上に茶畑として残された平坦面上を、C地区は土砂採集で包含層が削られてしまった西斜面である。トレンチ調査は番号順で行なわれ7・8トレンチからは住居跡状の落ち込みと弥生式土器が出土し、11・13・15トレンチでは溝状遺構と壺形土器を中心とする弥生時代後期の遺物が検出された。

トレンチ調査結果は次のとおりである。

〔A地区〕

試掘トレンチを5ヶ所設定した。

1トレンチ…東南斜面に2×2mで設定する。土層としては流れ込みの黒色土が見られるが若干数の弥生土器片が出土するのみで遺構等の検出はない。

2トレンチ…山の東側平坦面に設定した。茶畑として丘陵の一部を削平しており、砂質の地山に近い。遺構・遺物は発見されていない。

3トレンチ…東南斜面中程に設定、遺構・遺物は検出されていない。

4トレンチ…山腹の平坦面。神社を祭るために造られた整地層がある。地山が露出している部分が多い。

5トレンチ…山頂に設定したトレンチで古墳・台状墓等を考えたが、遺構・遺物は検出されていない。



第1図 一色前田遺跡位置図



第2図 トレンチ設定図

〔B地区〕

試掘トレンチを3ヶ所に設定した。遺構・遺物の検出された7・8トレンチを拡張した。6トレンチ…旧畑地。若干数の弥生土器片を出土するが遺構・包含層は確認できなかった。7・8トレンチ…トレンチ最下層、地山直上の黒褐色土から大量の弥生土器（壺・甕）と住居跡の壁の立ち上り、Pit が検出された。このため茶畑跡全面を調査対象とし平面調査に切り換える。

〔C地区〕

試掘トレンチを8ヶ所に設定した。各トレンチとも斜面における流れ込みの状況がセクションに見られた。このうち、11・13・15トレンチでは丘陵間の谷部分を区画するように弥生土器を包蔵する大溝が検出された。その他のトレンチでは若干の土器片は検出されたが遺構等は見られなかった。

以上のような各地区の調査結果から発掘調査はB地区7・8トレンチを中心とする平坦面上と、西斜面の大溝の確認に全力を注いだ。

第2章 調査体制

〔調査体制〕

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 山 崎 恭 一

社会教育課長 松 本 長 平

社会教育係長 長 沼 宣 男

文 化 財 係 吉 岡 伸 夫

永 井 義 博（調査担当者）

調査参加者

前田又八郎 山内 一次 鈴木 政雄 山崎 友平 山内 英

鈴木 操 山内れい子 山内 石子 佃 えつ 岩田 とき

杉山 しか 松山 とく 山内勇美子 野村 れい 杉山 わき

山内れい子 山崎みつゑ（以上宇刈地区）

第3章 遺 跡 環 境

袋井市総面積の43%を占める丘陵地は河川等により大きく5つの丘陵地に分けられる。一色前田遺跡はこのうちの油山可睡丘陵と呼ばれる山の西側に位置する。地質学的には袋井市の丘陵地の大部分は掛川層群と呼ばれる地層で、さらに宇刈一色周辺は曾我累層の山梨砂層と呼ばれる淡黄色の粗粒砂の分布範囲内である。この砂層は厚さ約160mほどあり部分的にシルト層や礫層の入りこみが見られ掛川市篠場から袋井市を経て森町一宮南部まで広がるものである。住居跡・大溝等の遺構もこの砂層に掘り込まれているためくずれやすく輪郭が不鮮明であるため調査はたいへんに難行した。（『袋井市史 通史編』の第1編参照）

宇刈・春岡の丘陵上には弥生時代・古墳時代の散布地が多くとくに宇刈・春岡横穴群に代表される横穴墓の分布が濃密であることで知られていた。さらに最近になって丘陵先端の平坦地や、丘陵から沖積平野に移る微高地周辺からも遺物が採集されることがわかり（前田庄一氏のご教示による。）その分布調査の結果は1985年版の袋井市遺跡地図・袋井市遺跡地名表に生かされることとなった。周辺で発掘調査された遺跡としては本遺跡から丘陵沿いに南1.5km下った丘陵先端に位置する春岡第1号墓がある。これは尾根上に4本の溝に囲まれた3つの主体部が検出されており、出土遺物は弥生中期から古墳時代初頭までの遺物であるが調査者は古い時期を考えているようである。このような類例から、丘陵先端の遺物採集は墳墓・周溝墓・住居跡とかなりの遺跡の存在が推定され今後の調査が楽しみである。この丘陵の西側には、川田遺跡・鶴田遺跡・鶴松遺跡・徳光遺跡・土橋遺跡と弥生中期から古墳時代にかけての大集落群が形成されておりこれら平地の遺跡との関係が今後大きな問題となってくるであろう。

第4章 遺構概説

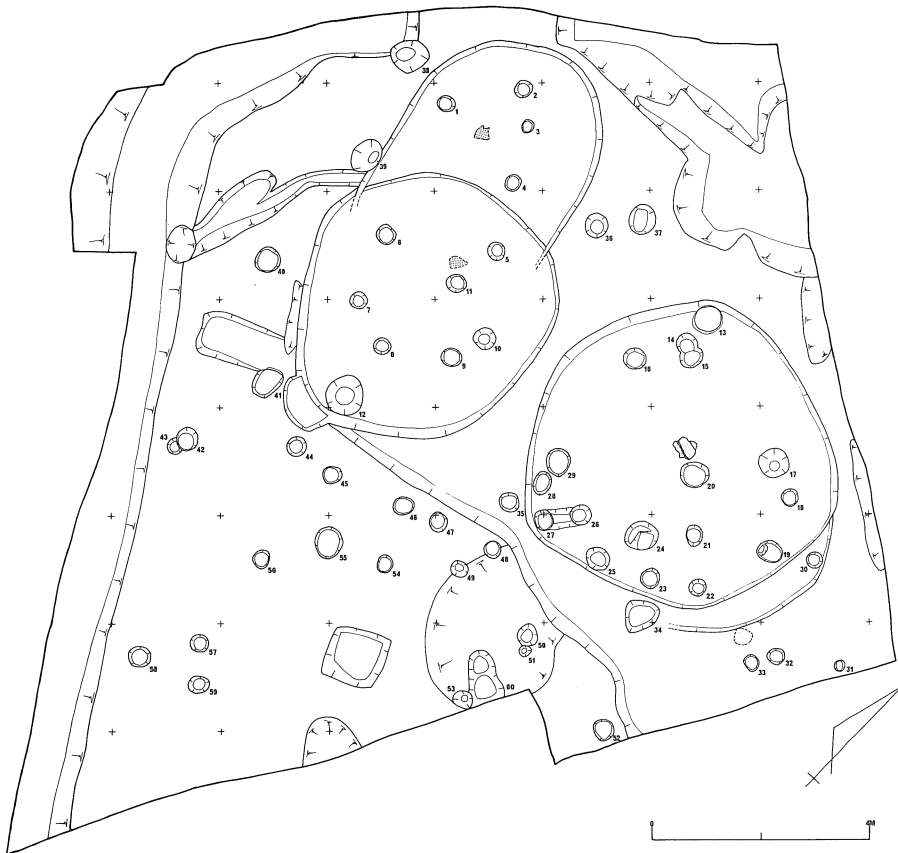
第1節 丘陵上平坦面の遺構（B地区）

（a）第1号住居跡

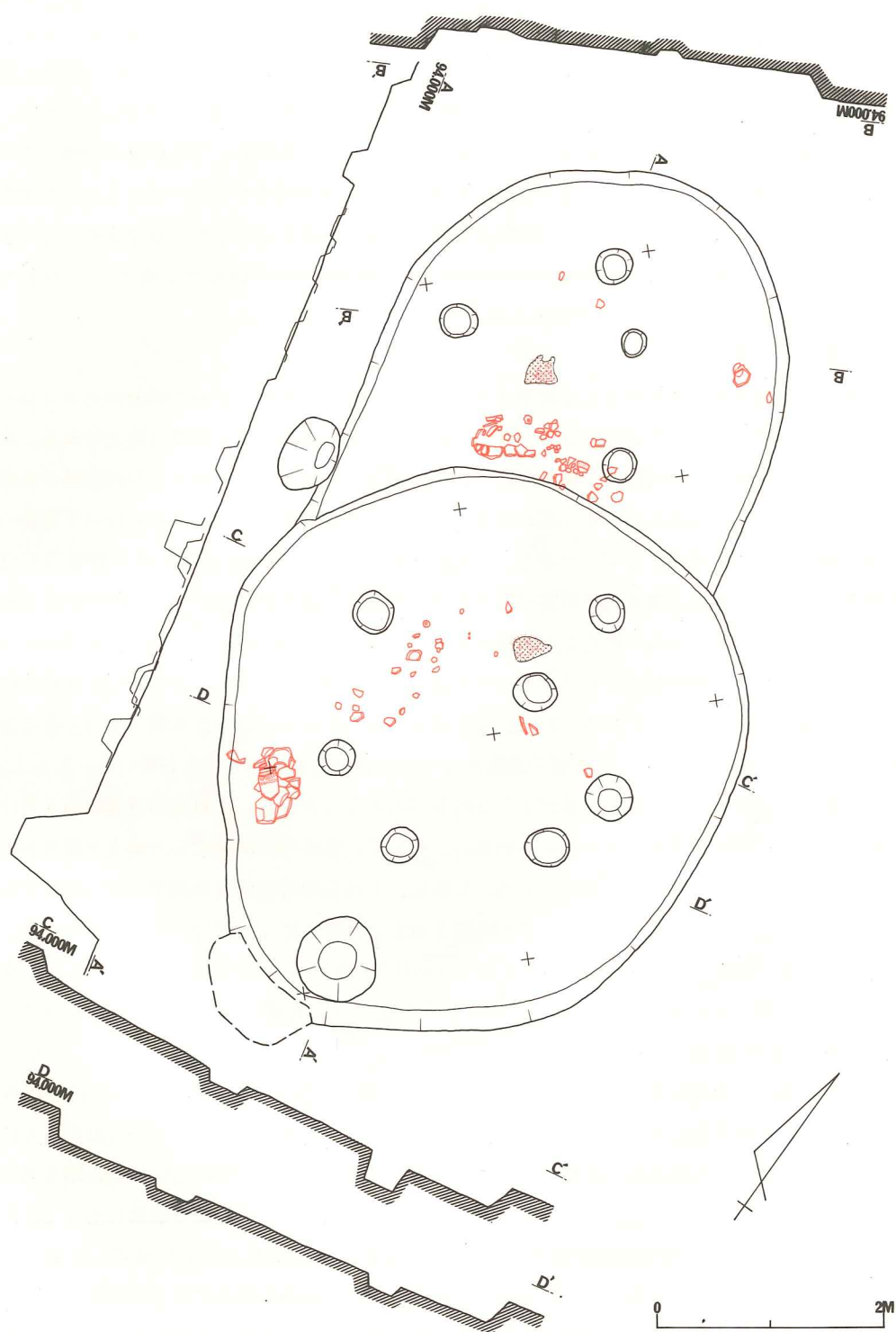
4軒の高地性集落の最北端に位置する竪穴住居跡である。長隋円形のプランをもつ遺構であるが南側部分を第2号住居跡と重複しており第2号住居跡より高いレベルの床面と壁の立ち上りは残念ながら確認できなかった。第2号住居跡と接する付近で第1号住居跡中央やや西寄りに焼土塊があり炉跡の存在と思われる。柱穴と思われる Pit は4ヶ所検出されており焼土を囲むかたちで位置している。土器片等の遺物は焼土付近に集中して出土しており壁際の遺物出土はきわめて少なくなっている。第1号住居跡、第2号住居跡ともベースの黄白色砂層に掘り込まれて、覆土も砂質の明るい褐色土のためその新旧関係はつかめていないが出土遺物から見ると時期的な差はほとんど見られない。住居跡の規模は長軸4m、短軸3.5mで壁高は残りの良い部分で25cmを計る。壁溝は精査したが見つかっていない。柱穴の規模はそれぞれ直径約30cm前後、深さ6～14cmの数値である。

（b）第2号住居跡

平坦地はぼ中央に位置する竪穴住居跡で、第1号住居跡と同じ長隋円形のプランをもつ遺構



第3図 住居跡群全体図（B地区）



第4图 第1・2号住居跡实测图

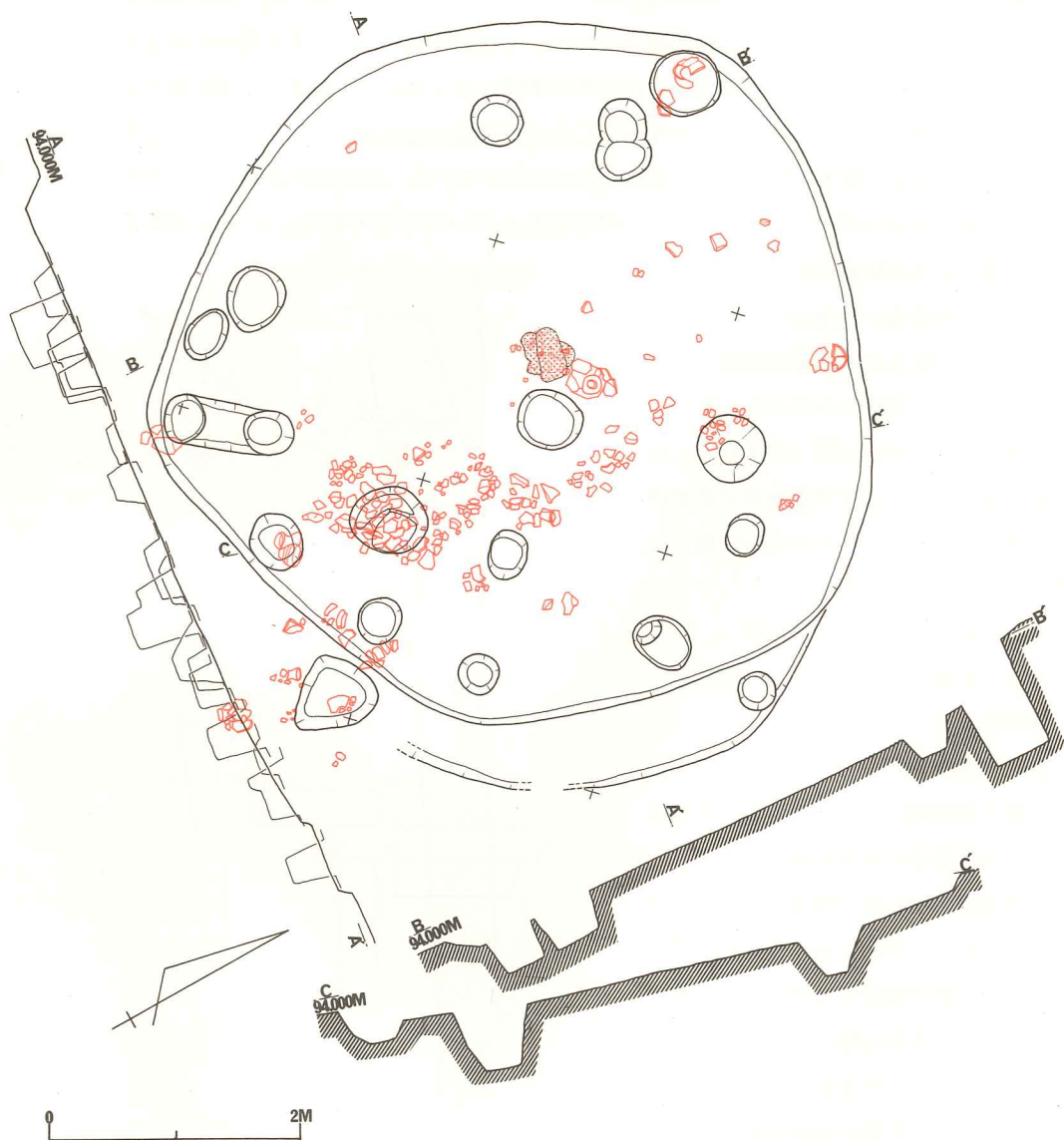
である。住居跡中央やや北寄りにややくずれた焼土塊があり炉跡と思われる。この炉跡の切断状況が第1号住居跡との重複を考えると第1号住居跡が後出であると考えられるがセクション等で確認されていないため定かではない。この焼土塊を中心にPit 5～10の柱穴と、炉跡に接する形で住居跡中央にPit11をもつ。また住居跡南端にやや大きめの落ち込みPit12がある。これは規模・形態より貯蔵穴的性格をもつと思われる。また、この第2号住居跡の南壁はそのまま段状の遺構となって第3・4号住居跡の南側を通して調査区外まで続いている。出土遺物は炉跡周辺に散在する土器小破片と、南側の貯蔵穴の横の床直から出土したほぼ完形になる壺形土器がある。住居跡の規模は長軸5m、短軸4.5mで壁高は残りの良いところで20～25cmを計る。柱穴は直径30～40cmのものが多く深さは10～30cmである。

(c) 第3・4住居跡

丘陵上平坦面東端に2軒重複して位置する。第3号住居跡は壁がくずれた部分があってはつきりしないが円形の堅穴住居跡である。ここで確認された住居跡の中で規模は最大である。第3号住居跡の炉跡は住居跡はば中央に位置し、炉の焼土は2層になっておりこの住居跡のみでも2つの生活の画期が求められると思われる。これは住居跡南側の柱穴が2列になって建物の拡張があったことを示すことでもわかる。住居跡北側のPit13はやや規模が大きく貯蔵穴的な性格を持つようである。第4号住居跡は第3号住居跡の南側に、焼土とPit30～34だけが検出されている。住居跡の壁はかなり精査したが検出することはできなかった。ここから出土遺物は多く壺形土器、高坏、台付甕などバラエティーに富んでいる。さらにこれらの遺物は住居跡南側に集中する傾向を示し、またレベル的に見ても大きく2つに分けられる。本報告では土層の遺物を第4号住居跡の遺物として、下層の遺物を3号住居跡の遺物として報告している。しかし、3号住居跡の2層の炉跡や柱穴の並びより2時期が考えることから、これらの遺物が第3号住居跡の中で2時期に分けられるのかもしれない。そして、第4号住居跡とした焼土が屋外炉のような性格を示すとも考えられるのである。しかし、これらの遺物が前後関係を持つ資料であるとしても、それがそのまま大きな土器の画期を示すとは考えにくい部分が多いと思われる。第3号住居跡の規模は直径約6m弱の大きさで、各柱穴は30～50cmの直径と、15～50cmの深さを持つ。貯蔵穴と考えられるPit13はやや大きく長軸55cm、短軸50cm、深さ50cmを計る。

(d) その他の遺構

住居跡西側のやや高位置の平坦面上に散在するPit群は約14あるがこれについてはその性格をほとんど推察することができない。また、Pitの覆土から遺物を出土しないものが多く時期的にも住居跡と同じ弥生時代後期とするか、その他の銭貨等から12世紀頃や16世紀頃を考えるべきか不明な点がある。しかし、このうちでも住居跡を囲むような段状の遺構に沿って位置するPit40～50の柱穴は弥生時代の遺構と考えられ住居群を巡る柵のようなもので、防御とカモフラージュの両方の性格を持っていたと考えられる。また丘陵西側のみに残る階段状の部分は低地から丘陵上の集落に通ずる道路状の遺構の一部と考えられ、この下に位置する溝状の遺構との関係が注目される。その他としては第2号住居跡南側で切り合う土墳墓があるが、覆土内より出土した銭貨等からやや時代が下って16世紀頃の遺構と考えられる。



第 5 图 第 3・4 号住居跡実測図

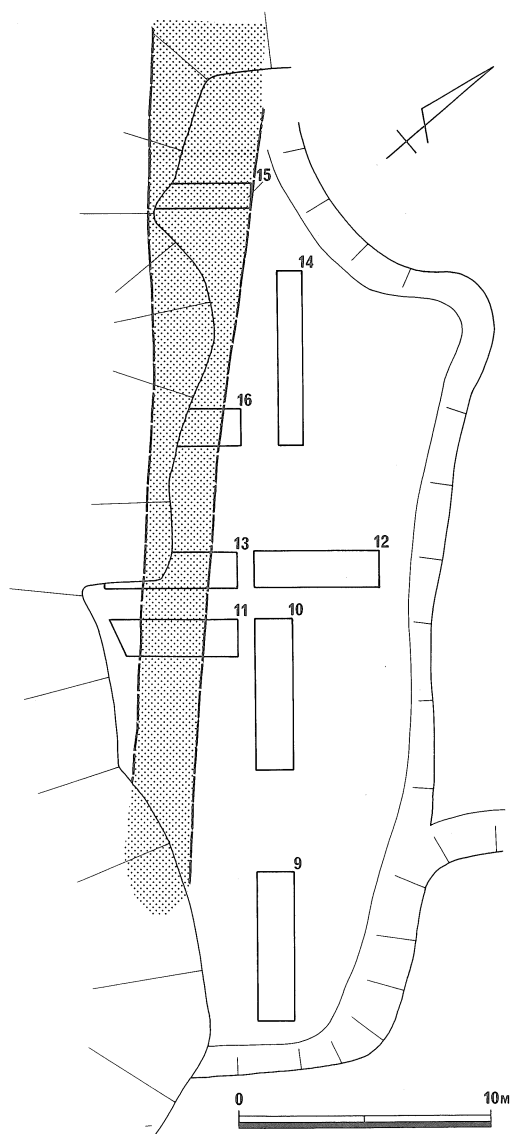
第2節 西斜面の遺構（C地区）

一色前田遺跡発見のきっかけとなった当遺跡西斜面の包含層（黒色土）の広がりを確認するため第6図のように確認トレンチを入れた。当初、土砂採集によるカッティングでは厚さ1.5 mで斜面の傾斜に沿って堆積する弥生土器の包含層と考えていたが、第11、13、15、16トレンチの各セクションに溝状の大きな落ち込みが確認された。これを結んでいくと第6図のスクリーンを入れた部分にあたり、丘陵の谷部に掘られた溝状遺構となった。この遺構は土砂採集によりその西側部分を失っているためその全容を知ることが不可能となっているが、おおまかな数値としては幅3～4 mで長さは確認された部分で35 mに及んでいる。この溝状遺構は山頂付近より小さな丘陵出っぱり西側の谷部を通して山裾まで及んでいたと思われる。この発掘調査の終了した後この丘陵東側のカッティングでも同様な溝状の遺構が検出されており、この遺構が小さな丘陵上の平坦面に位置する住居跡群を巡るように設けられていたと思われる。（第17図の模式図を参照）このように高位置にある集落でも最近の発掘調査で溝状遺構を持つ遺跡が増加しているがその性格としては次の4つが考えられる。

- (1) 争いによる対人防衛的な性格
- (2) 道など交通手段の1つとしての性格
- (3) 排水用の溝
- (4) 小動物等の進入を防ぐため。

全国各地の調査例では現在のところ西日本における高地性集落の研究が進んでおり、一般的には『倭国大乱』との関連によって説明するケースが多く、一部に畑作農耕を考える説もあるが当遺跡の現状では無理に生産性の劣る畑作を行う必要性を持たない立地条件であるため防衛的なものと考えておきたい。

さらに現在、土砂採集によって失われてしまった西側の山にも何らかの遺構が存在していたことは十分に推測でき、調査されることなく破壊されてしまったことはたいへん残念なことである。また今回調査対象外のここ宇刈地区の丘陵先端部や平坦部には散布地が多く今後十分な注意が必要とされる。



第6図 西斜面トレンチ設定図（C地区）

第5章 遺物概説

一色前田遺跡出土遺物はここで主に紹介する弥生式土器、土師器、須恵器等がある。その外には一部今回触れていないものもあるが銭貨、ノミ形磨製石斧、砥石、中世陶器、カワラケなどがある。本文では第1号住居跡から第4号住居跡の遺物を中心に、各トレンチの出土品や西斜面の溝状遺構出土品、それに地元に住んでいる前田庄一氏の採集品についても報告している。銭貨については拓影をのせてある。

第1号住居跡 (No.1～No.2)

1は住居跡ほぼ中央の炉跡周辺床直上から出土した台付甕の口縁部から胴上半部までの破片である。口径は21.5cmで胴部最大径もほぼ同じ数値である。内外面とも状態はたいへん悪く、口唇部にわずかにキザミが施されているのと口縁部内外のヨコハケが確認されるのみである。

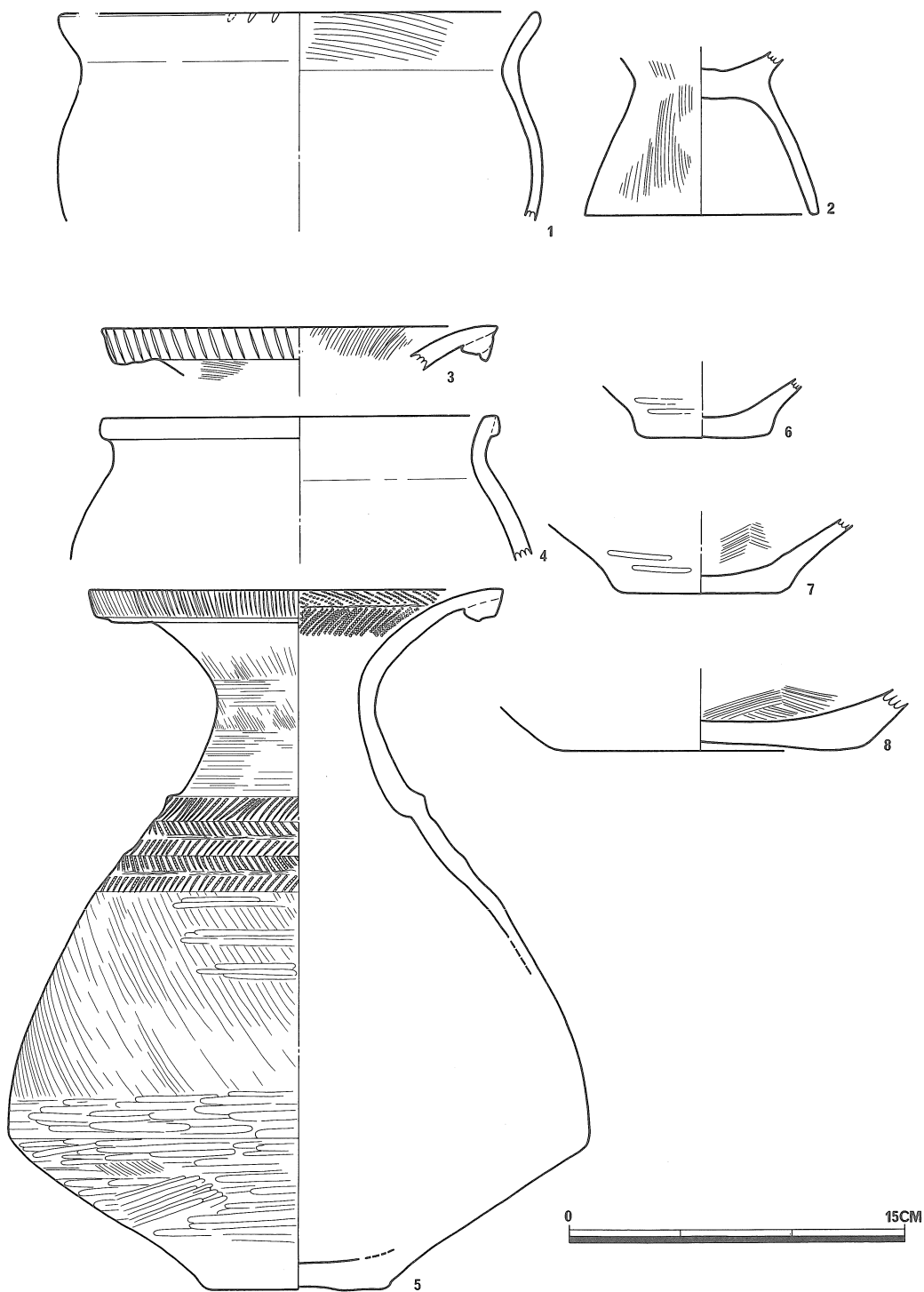
2は台付甕の台部で住居跡壁の東側部分に流れ込んだ状態の覆土より出土している。台部底径は10.5cmで外面ではタテハケが確認できる。

第2号住居跡 (No.3～No.8)

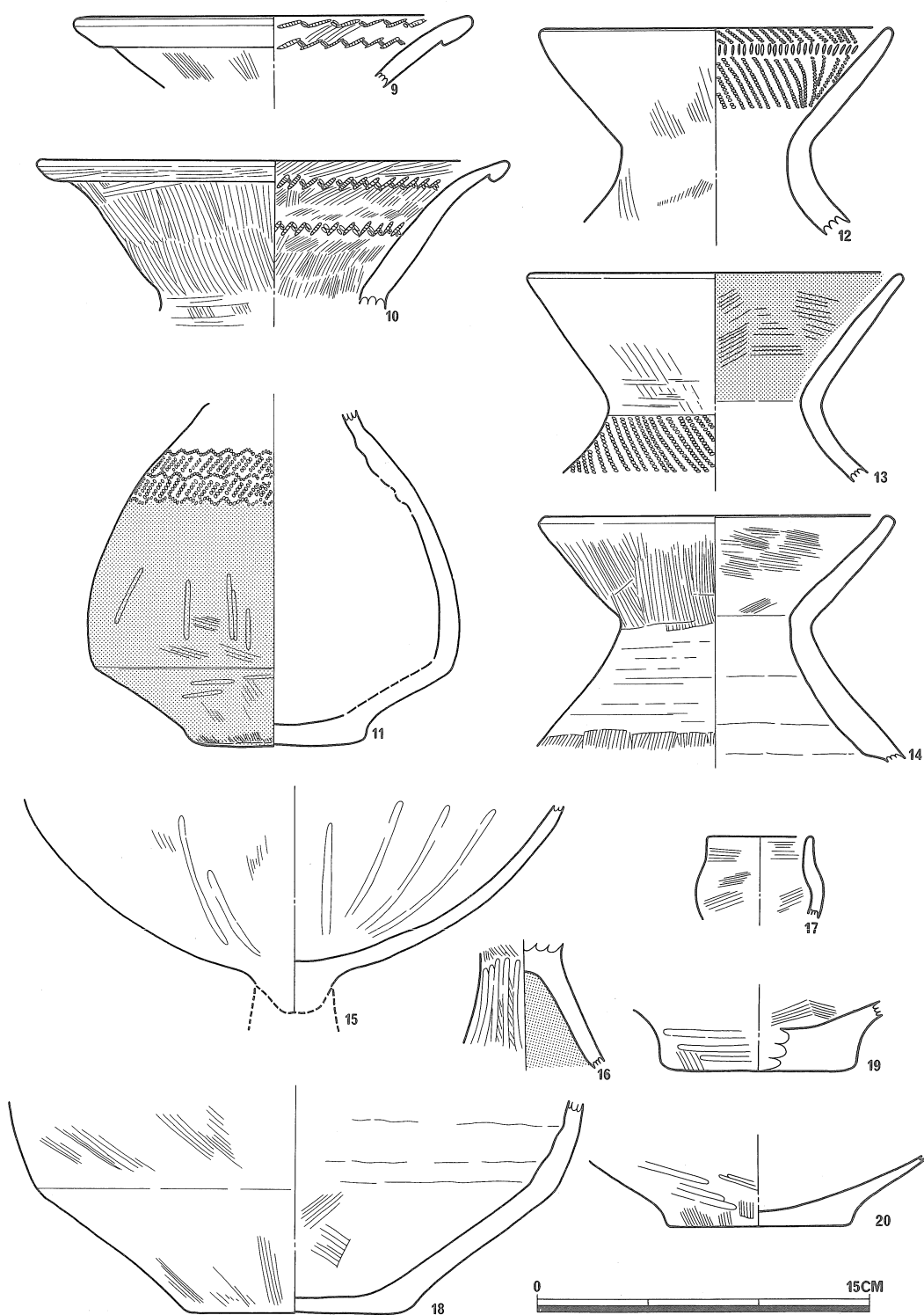
3は壺形土器口縁部の小破片で折り返し口縁外側にはタテ方向にキザミメが施されている。外面はハケでミガキはこの部分ではわからなかった。口径は推定17.7cmである。4は短頸壺のようであるが内外面とも、剥落が激しく調整痕は判別できなかった。5はこの住居跡の中央やや西寄りの床直上より発見された壺形土器である。ラップ状に開く折り返し口縁と胴部最大径が低い無花果形の胴部を持つ菊川式土器の最終段階の形を示している。この土器の特徴は口縁部内側に結節縄文を施し、口唇部外側はタテ方向のキザミ、頸部はタテハケ、ミガキの後にヨコナデを用いることである。また肩部の有段羽状の文様帯部分の幅が広くまた段ははっきりと意識して残されている。口径18.5cm、胴部最大径25.8cm、底径8.2cmを計る。6、7、8は壺形土器の底部である。

第3・4号住居跡 (No.9～No.29)

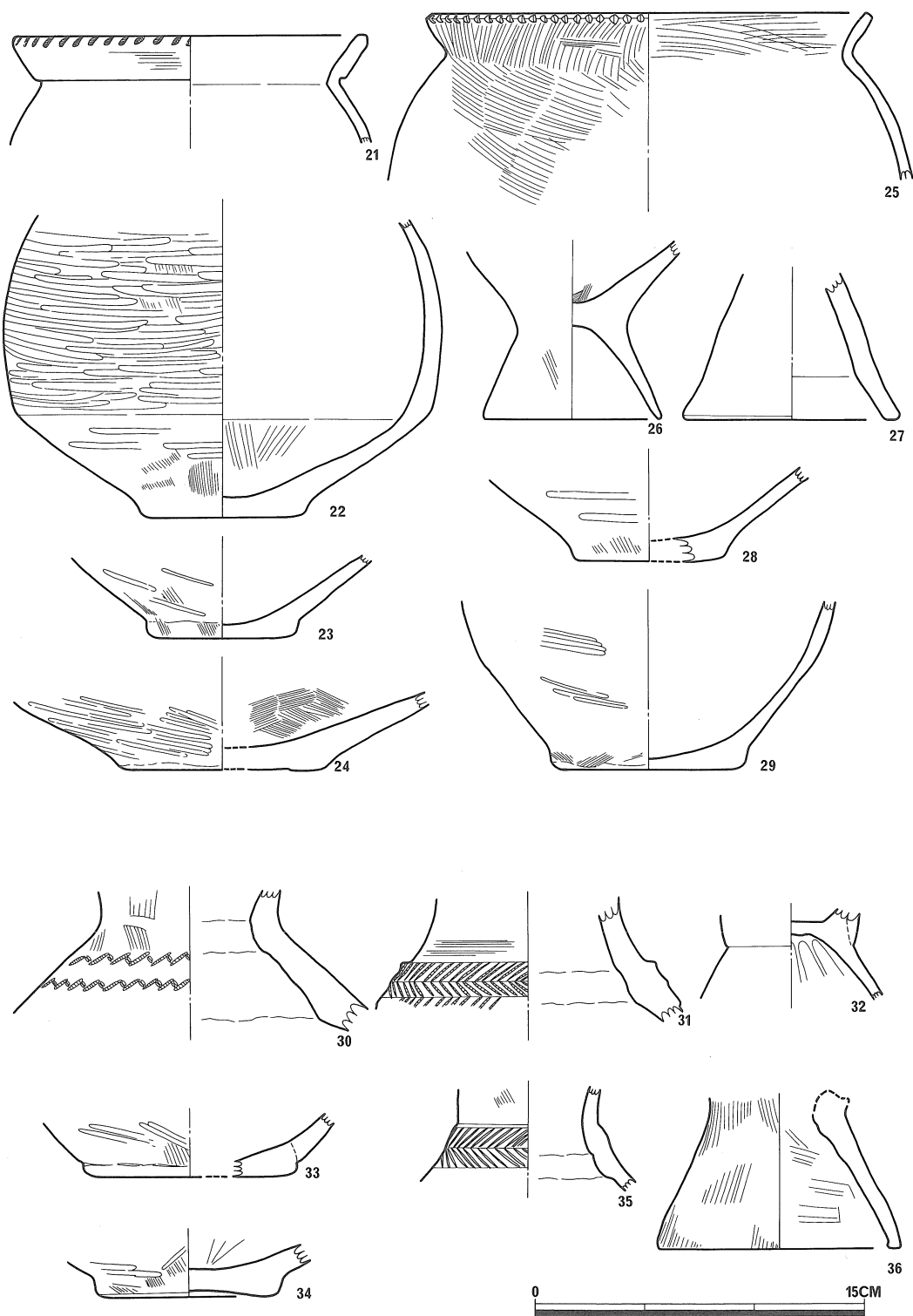
9・10はともに壺形土器の口縁部の破片である。外面はハケとヨコナデで内面はハケの後二列に縄目状文を施してある。11の壺形土器はやや小型である残りは良く口縁部を欠くのみである。胴部外面は肩部に結節縄文を施し、全体的にはハケ→ミガキ→赤色顔料の順となっている。内部の調整は不明である。12・13・14は壺形土器の肩部より上部である。12は口径15.8cmで外面はハケ→ナデで仕上げ、口縁部内側は結節縄文が施されている。13は外面はハケ→ナデで肩部文様帯は結節縄文であろう。口縁部内側はハケの後赤色顔料が塗られている。14は外面タテハケの後、肩部をヨコナデで仕上げている。内側はハケ→ナデで口径15.1cmを計る。15は高坏の坏部のみで脚部及び口縁部を欠いている。内外面ともハケ→ミガキで仕上げられている。16は高坏の脚部である。17はミニチュアの壺の小片である。ハケ→ナデのようであるが破片が小さくはっきりしない。18・19・20は壺形土器の底部である。21より第4号住居跡の扱いである。これは甕形土器と思われるが小片で内外面の残りの悪く、口唇部のキザミとヨコナデがわずかに確認できるのみである。22は壺形土器の胴部から底部である。外面はハケ→ミガキの仕



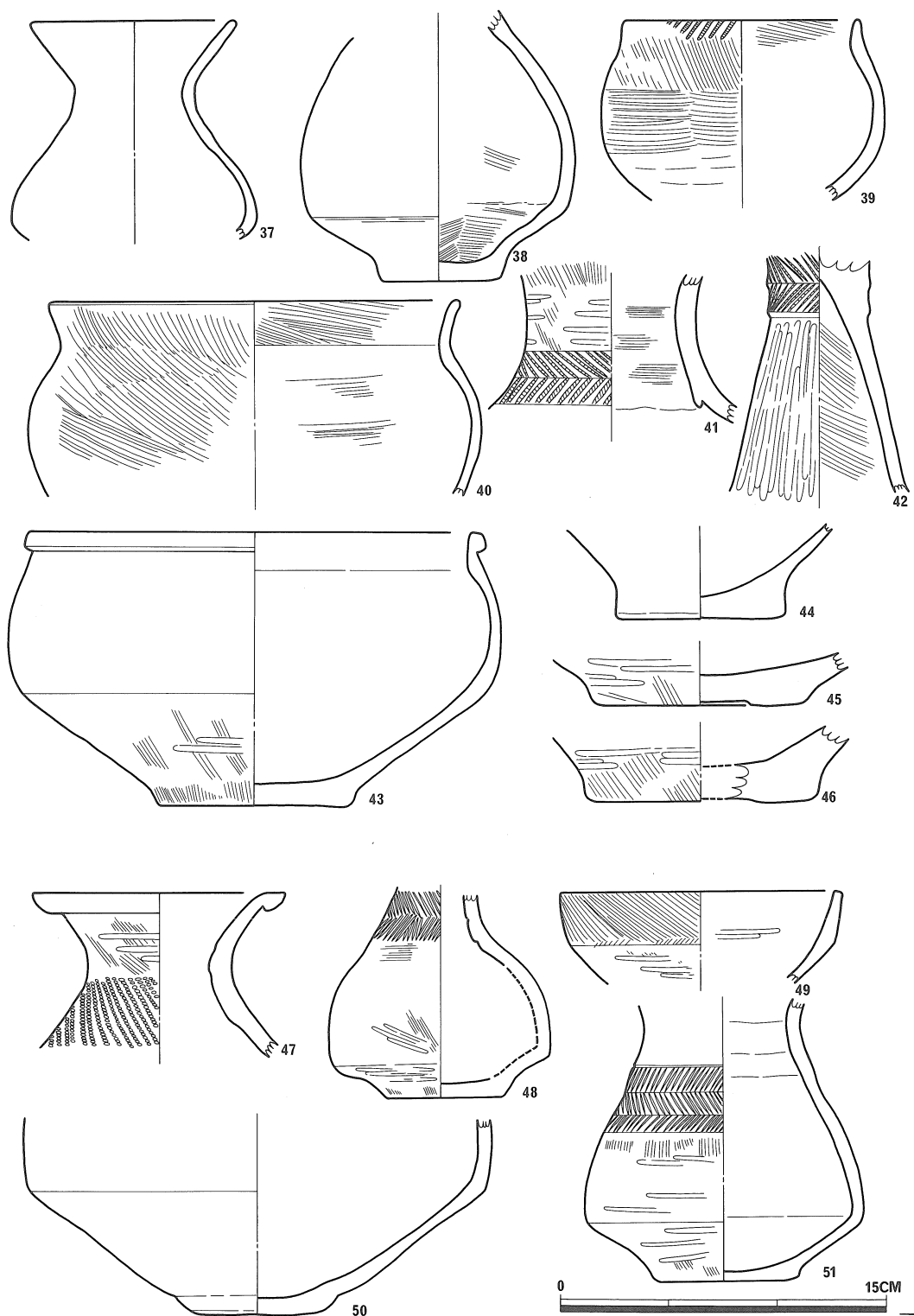
第7図 出土遺物実測図(1)



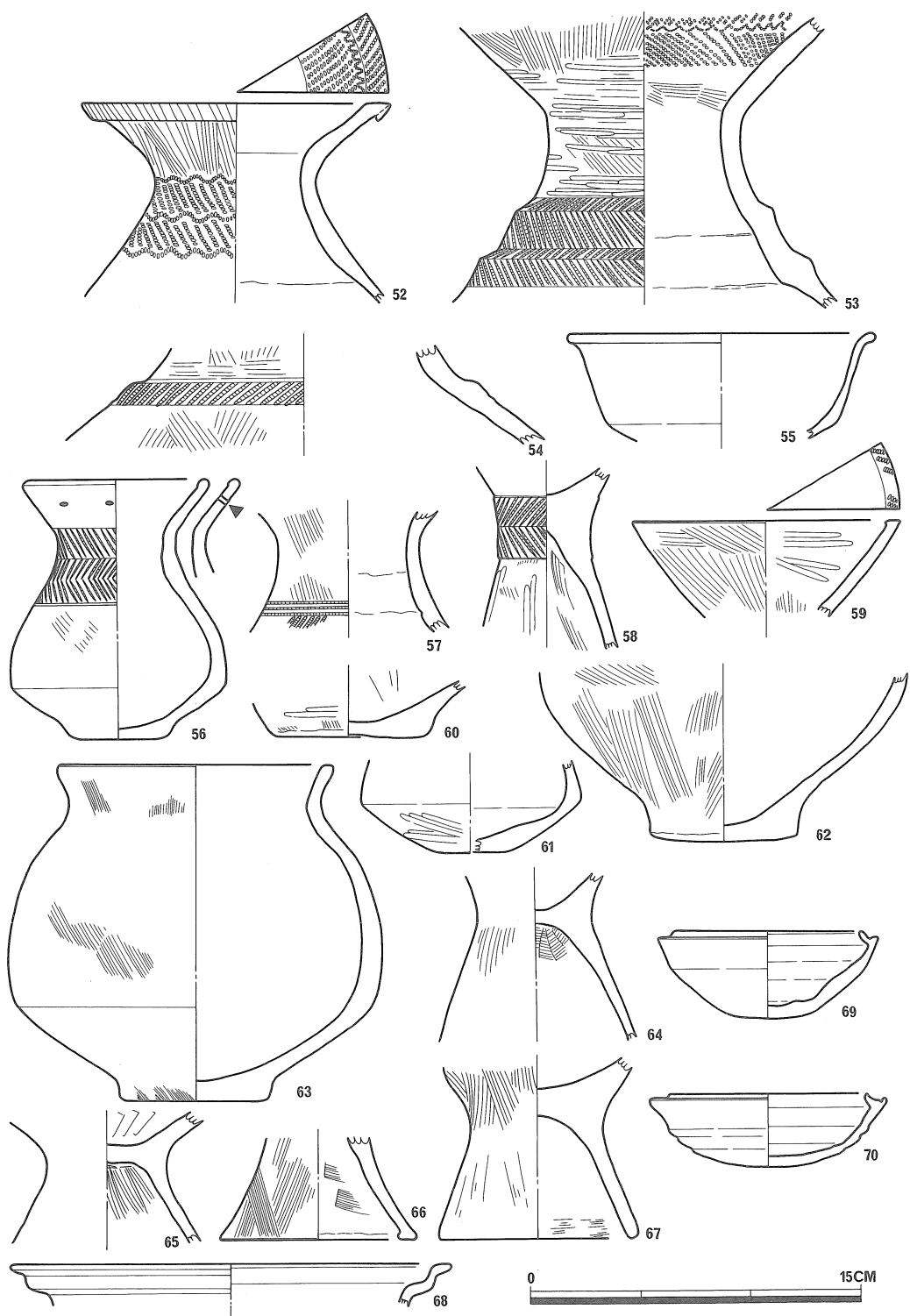
第 8 図 出土遺物実測図 (2)



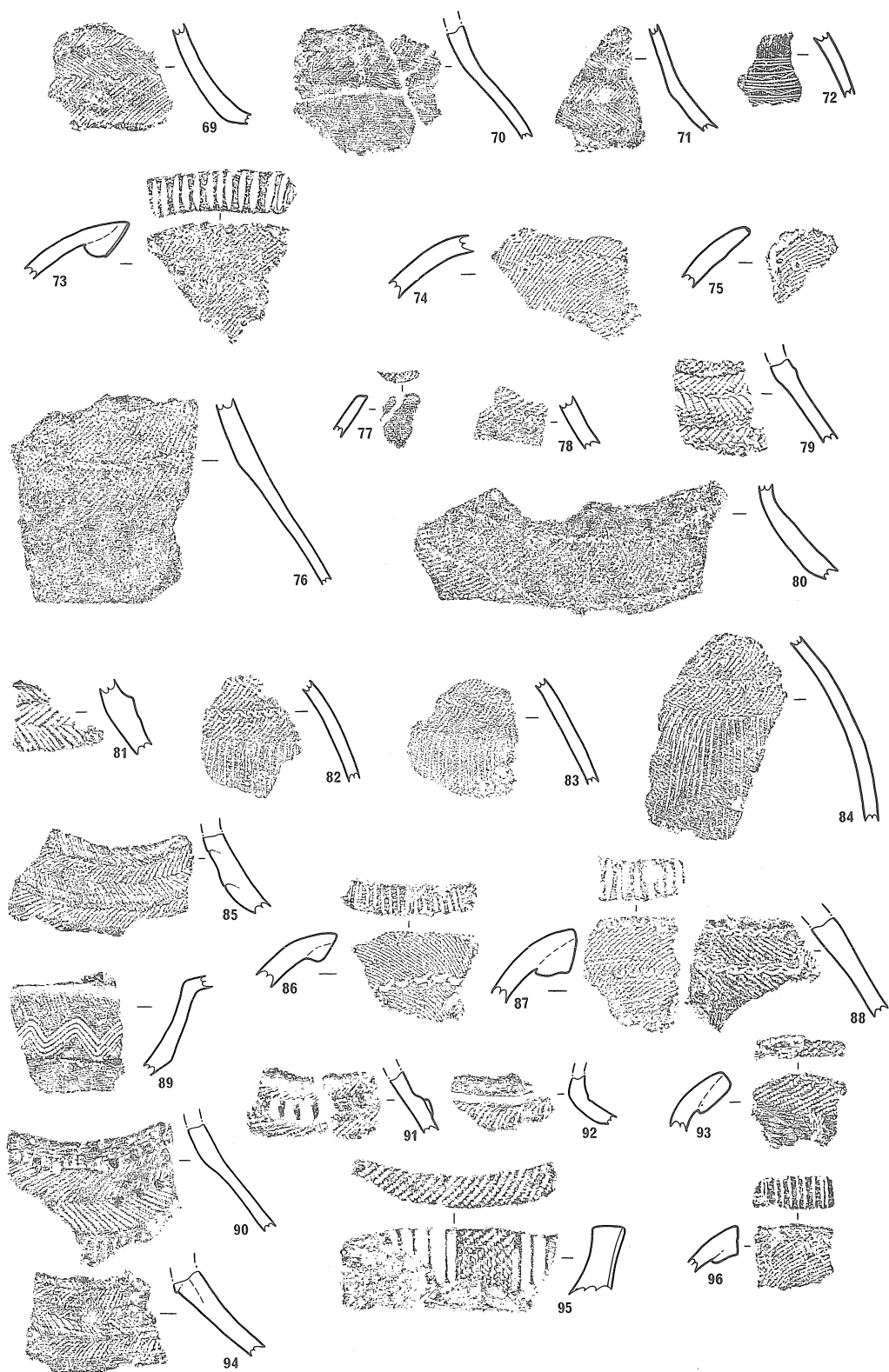
第 9 図 出土遺物実測図（3）



第10図 出土遺物実測図（4）



第11図 表採遺物実測図



第12图 出土土器拓影

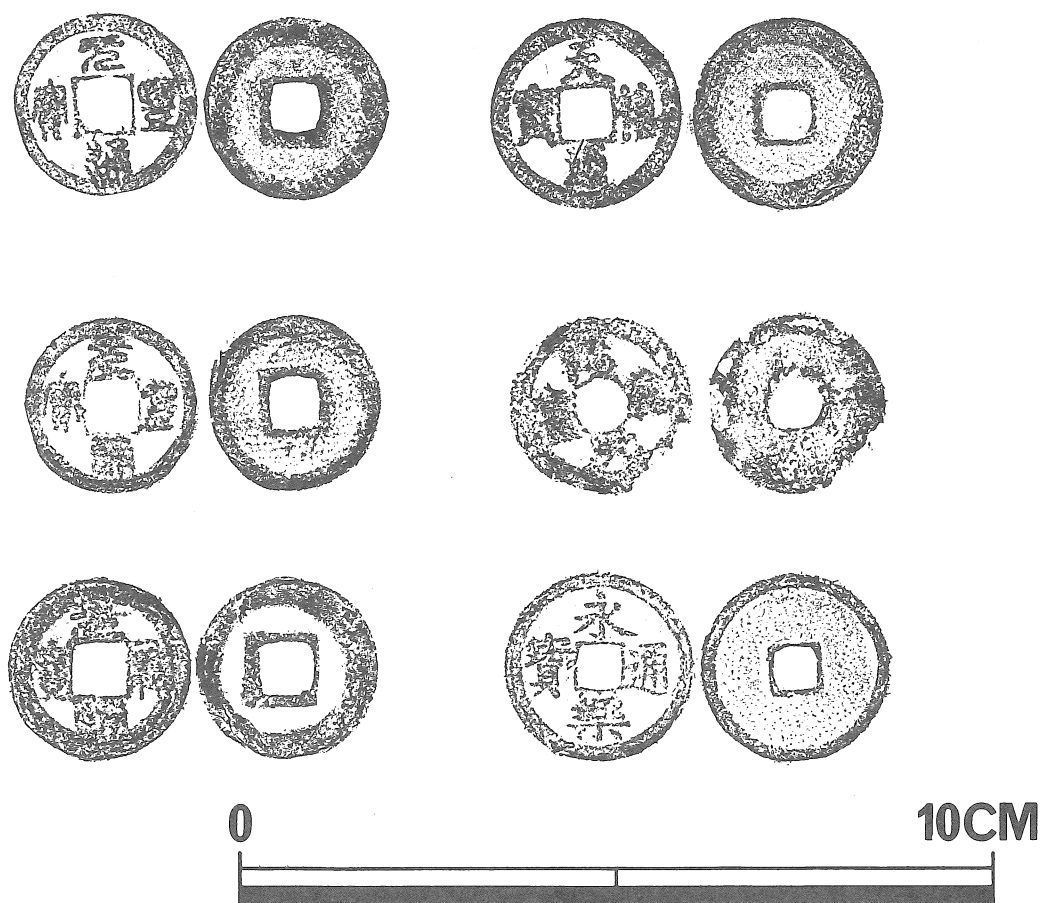
上げで、特にミガキはかなり上部まで施されている。23・24は壺形土器の底部である。25は台付甕の上部破片でくの字に外反する口縁と球状と思われる胴部からなっている。口唇部は櫛状工具によるキザミを、口縁部から胴部にかけてはハケで仕上げられている。26は台付甕の台部のようなものである。底径8.2cmを計るが内外面の調整ははっきりしない。27は高坏の脚部である。脚端部の屈曲はいわゆる菊川式土器の高坏に比べるとはるかに退化しており内面にわずかにその痕跡を残すのみである、28・29は壺形土器の底部である。

各トレンチ及び遺跡内採集の土器 (No.30～No.51)

30は6トレンチ内より出土した壺形土器の肩部である。外面はハケ仕上げの後、縄目状文が2列に施されている小破片である。31は7トレンチ調査時に出土した壺形土器の肩部である。櫛刺突の有段羽状文が施され、頸部はヨコナデで仕上げられている。No.5の土器と類似したものだろうか。32は台付甕の接合部片である。残りが悪く調整は不明である。33は8トレンチ出土、34は14トレンチ出土の壺形土器の底部である。35は櫛状工具による有段羽状文を持つ壺形土器の肩部である。36は台付甕の台部で底径は10cmである。内外面はハケで仕上げている。35～46は西斜面のトレンチまたはガケ下からの出土品である。37・38はともに壺形土器であるが内外面とも残りが悪く調整痕ははっきりしない。39は甕形土器片である。40も甕形土器片であるが口唇部のキザミを持たず口縁部の外反も少ない。41は壺形土器の肩部で櫛状工具による刺突羽状文が施してあるが段をもたない土器である。42は高坏の脚部である。接合部に櫛状工具による刺突羽状文をもち、外面はタテミガキで仕上げられている。43は短頸壺の破片で口径は推定で21cmを計るが内外面とも残りが悪く調整ははっきりしない部分が多い。44～46は壺形土器の底部破片である。47は壺形土器の肩部接合部分で割れた破片で、肩部文様帯には単節縄文が残っている。頸部はタテハケの後にミガキで仕上げられ口径は10.6cmを計る。48は土器表面の残りが悪く調整の確認が難しいが、肩部文様帯は櫛状工具による刺突羽状文で胴部はタテハケの後ミガキで仕上げられている。49は鉢形土器の口縁部で口径は12.9cmを計る。外面はハケとミガキで、内面はミガキで仕上げられている。50は壺形土器の底部で底径5.8cmを計る破片であるが調整痕ははっきり残っていない。51はやや広口の壺形土器と思われるが、肩部文様帯は櫛状工具による櫛押圧横線文の下に櫛刺突羽状文が施されている。胴部はハケ→ミガキで仕上げられている。

一色前田遺跡周辺採集遺物 (No.52～No.70)

ここに掲載した土器は前田庄一氏が宇刈地区内をくまなく踏査された際に水田、畑地、道路のカットング、丘陵裾部等で採集した遺物の一部である。総量としてはテンバコ約3箱分ほどあるが、ここでは紙面の都合で他の遺物は割愛させていただいた。前田氏の宇刈・春岡地区における調査結果は『袋井市遺跡地図・袋井市遺跡地名表』で使用させていただいたが、この土器も新発見で登録された各遺跡より採集されたとのことであった。なお、番号の早い遺物は弥生式土器、番号の遅い遺物は土師器という傾向でのせたが時期的に弥生～土師器に移り変わる段階の遺物が多い。68はS字状口縁台付甕の口縁部破片、69・70は須恵器である。



第13図 出土銭貨拓影

その他の遺物

第12図の銭貨6点はB地区から出土している。天禧通寶（宋 1017年）1点、元豐通寶（宋 1078年）2点、永樂通寶（明 1408年）1点、判読不明2点の内訳であるが、このうちの宋銭3枚は2号住居跡と重複した土墳墓からの出土と思われる。この地区からは中世陶器片も若干検出されている。また、この付近の出土品としてノミ形の磨製石斧が出土しているが掛川市天王山遺跡からもこの種の出土例がある。

第4トレンチを設定した山腹の平坦面にはかつて小さな社が祭られていたとのことで、若干の金属製品の破片や近世と思われるカワラケが出土している。しかし、弥生式土器や土師器等はこれら遺跡の中心を離れた各トレンチからは急激に出土量が少なくなってしまう。

遺物小結

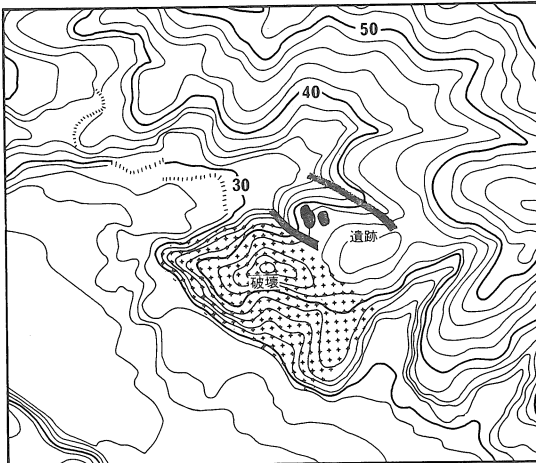
一色前田遺跡の出土遺物はそのほとんどが弥生式土器、土師器と呼ばれる土器類である。筆者はこれらの素焼きの土器類に弥生⇔土師器と土器の境界線を無理に引く必要性は感じないが、まさにこの時期の遺物である。また土質からいって木製品・金属製品は残存する可能性はないであろうが、石器が先に述べたノミ形磨製石斧と他に若干の砥石があるのみで極端に少ないこともこの遺跡の特徴となるであろう。

第6章 まとめにかえて

昭和55年9月の残暑のつく宇刈の丘陵上で行なわれた発掘調査の正式報告書の刊行が遅れてしまったことを担当者としてたいへんに申し訳なく思っている。この間、太田川流域では鶴松遺跡Ⅱ次調査、土橋遺跡周辺の調査と新しい資料が次々と発表され中遠地方のこの時期の流れが徐々に解明されようとしている。

本遺跡出土の弥生土器は、かつて久永春男氏が『日本考古学講座4』（1956年 河出書房）で述べた、いわゆる菊川式土器を中心とした一群である。壺形土器の特徴として、口縁部内側などの文様帯に結節縄文を多用していることがあげられる。また高坏が比較的少なく各部が新しい段階の土器を示している。土器No.1～No.29までの住居跡出土遺物は住居跡間に若干の前後関係があるがほぼ同時期（短期間）の遺物と考えられる。その他のトレンチまたは溝跡の遺物は住居跡とは異なる時期の遺物も出土している。このように口縁部内側、または肩部に結節縄文を施された壺形土器の出土例としては掛川市天王山遺跡の住居跡出土遺物の中（『掛川市天王山遺跡発掘調査報告書』1968 掛川市教育委員会）や菊川町白岩遺跡採集遺物（「西方川河川改修工事における採集遺物」『森町考古9』1975 加藤賢二、大橋保夫）の中の一群に見ることができる。特に天王山遺跡は丘陵上に立地し一色前田遺跡との共通性が注目される。第13図は古い地形図よりおこした一色前田遺跡周辺図に住居跡群と溝跡を入れたものである。このようにしてみるといまは土砂採集で削平されてしまった周囲の丘陵上にも何らかの生活跡があったことが十分にうかがえる位置であり、前田氏の採集遺物がそれを証明している。

銭貨とそれに伴うと思われる陶器の出土、第2号住居跡を一部切ってつくられた中世土墳墓はこの時期にも宇刈地区で人々の活動を証明するものであろう。伝承によるとここ宇刈一色には久野城主、久野宗能に仕えた富永藤兵衛の屋敷や、一色物見砦があり徳川・今川・武田氏の攻防によって争いの焦点となることがあっただろう。遺跡に隣接するところに富永藤兵衛の墓が残されている。その他宇刈七ヶ村には村松氏、西尾氏、内藤氏、長谷川氏、小野田氏などの武士がおり、のちに帰農して江戸時代には各村の庄屋をつとめ宇刈七騎と称された。



第17図 一色前田遺跡模式図

以上、調査の概要を述べてきたが今回の調査が果たした役割はたいへんに大きいと考えている。いままで、宇刈、春岡地区というと遠江でも指折りの大横穴墓が常に歴史の中心であったが一色前田遺跡では市内でははじめての弥生時代後期の高地性集落や中世土墳墓が検出され史料の空白部分を埋めるのに重要な成果を示したと思う。文末になったが、本報告書作成にあたり多くの方々のご協力を得た。ここに記して感謝したい。

（袋井市教育委員会 永井義博）



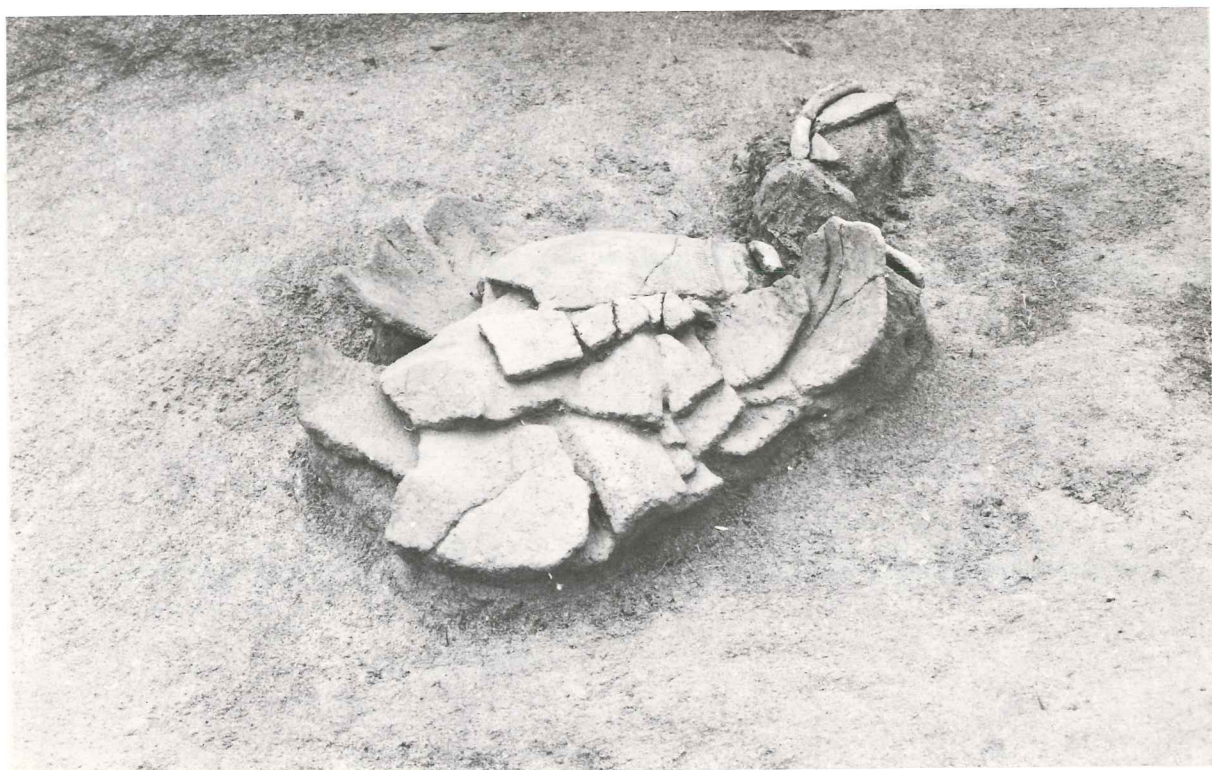
(A) 一色前田遺跡住居跡群 (山頂より)



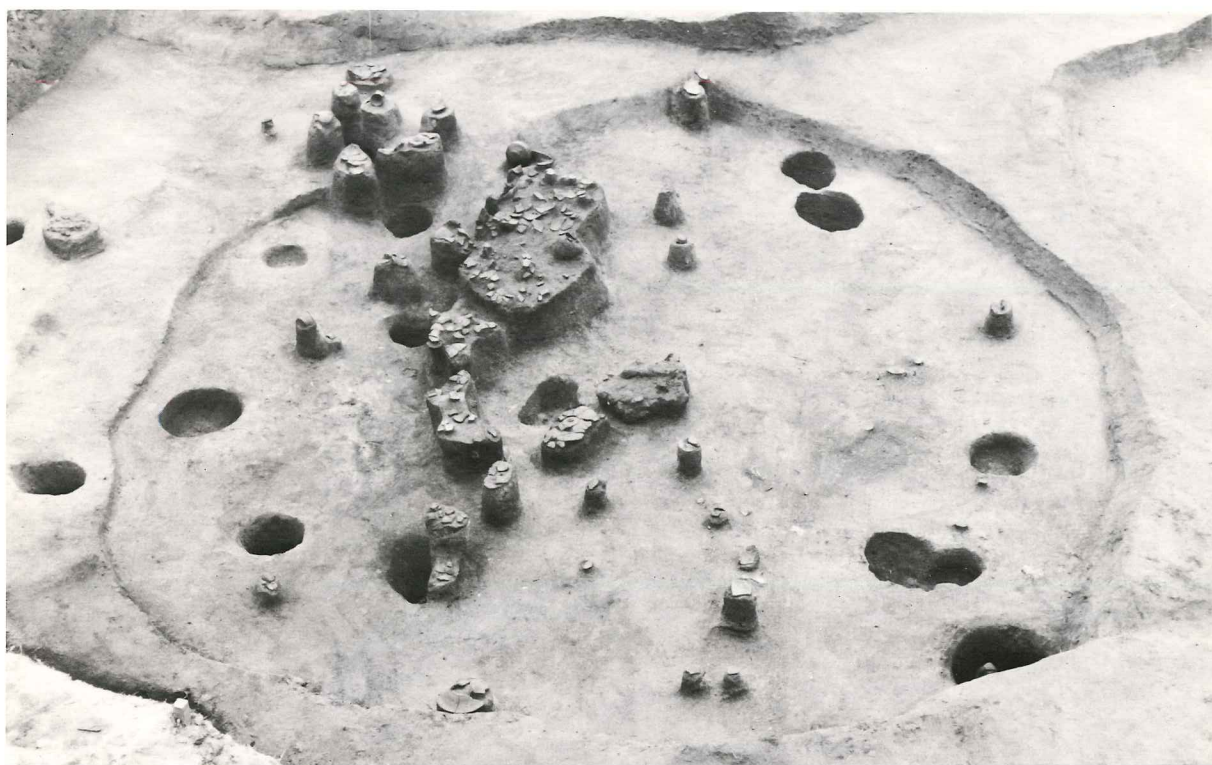
(B) 丘陵上より平野を望む



(A) 第1、2号住居跡



(B) 第2号住居跡出土遺物



(A) 第3、4号住居跡



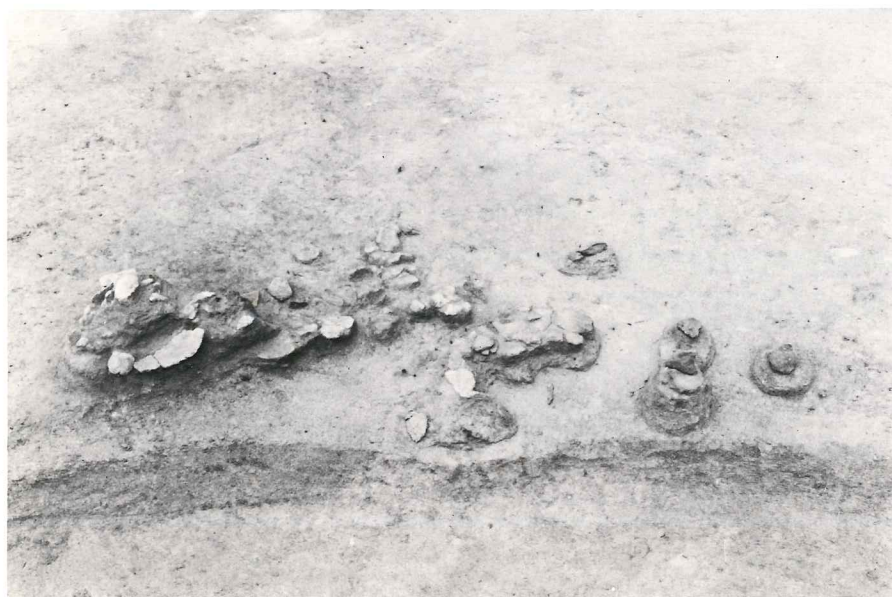
(B) 第3号住居跡遺物出土状態



(A)住居跡群
(東より)



(B)第2号住居跡
(北より)



(C)第1号住居跡
出土遺物

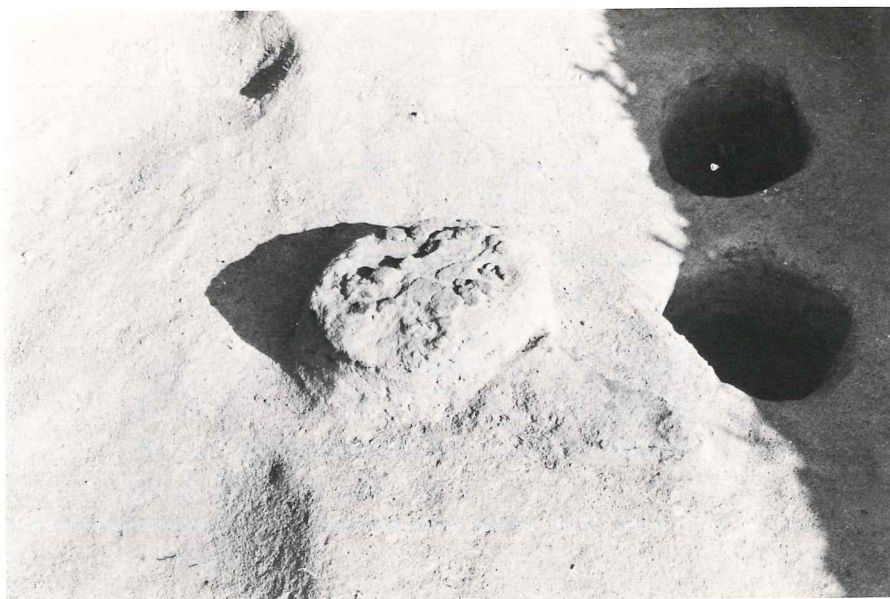
(A) 第 2 号住居跡
炉跡

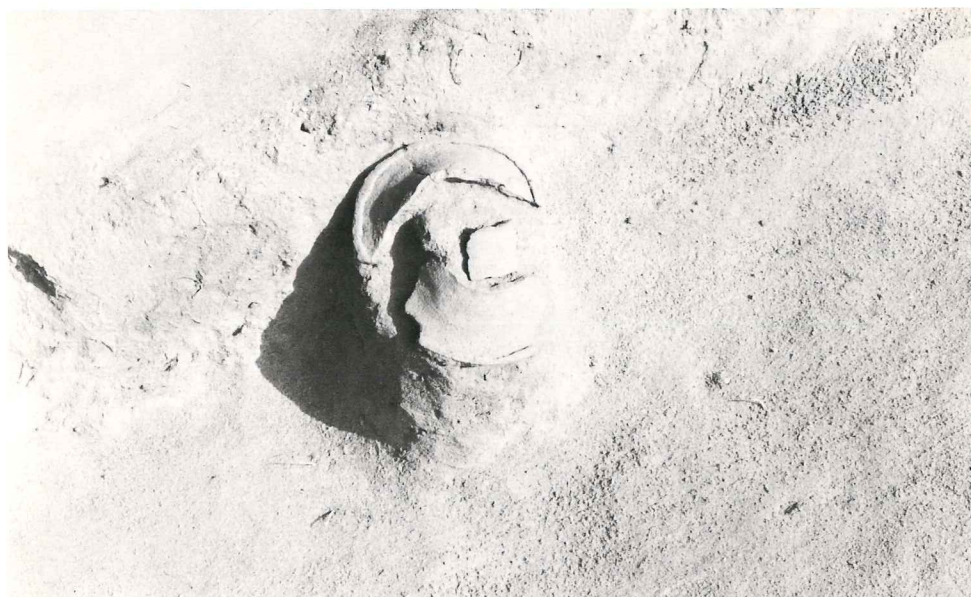


(B) 第 3 号住居跡
炉跡



(C) 第 4 号住居跡
炉跡

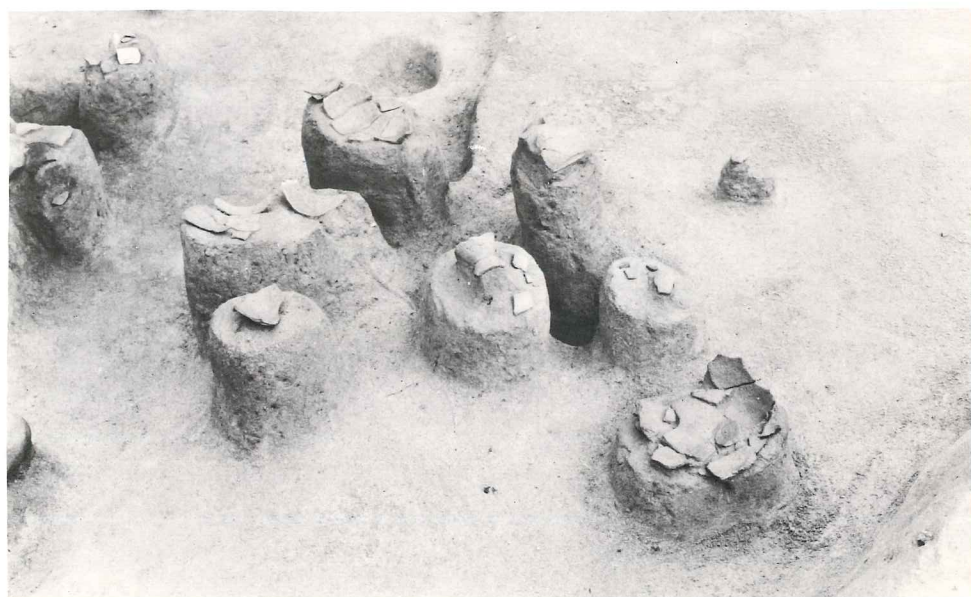




(A)第3号住居跡
出土土器



(B)第3号住居跡
貯蔵穴



(C)第4号住居跡
関連遺物



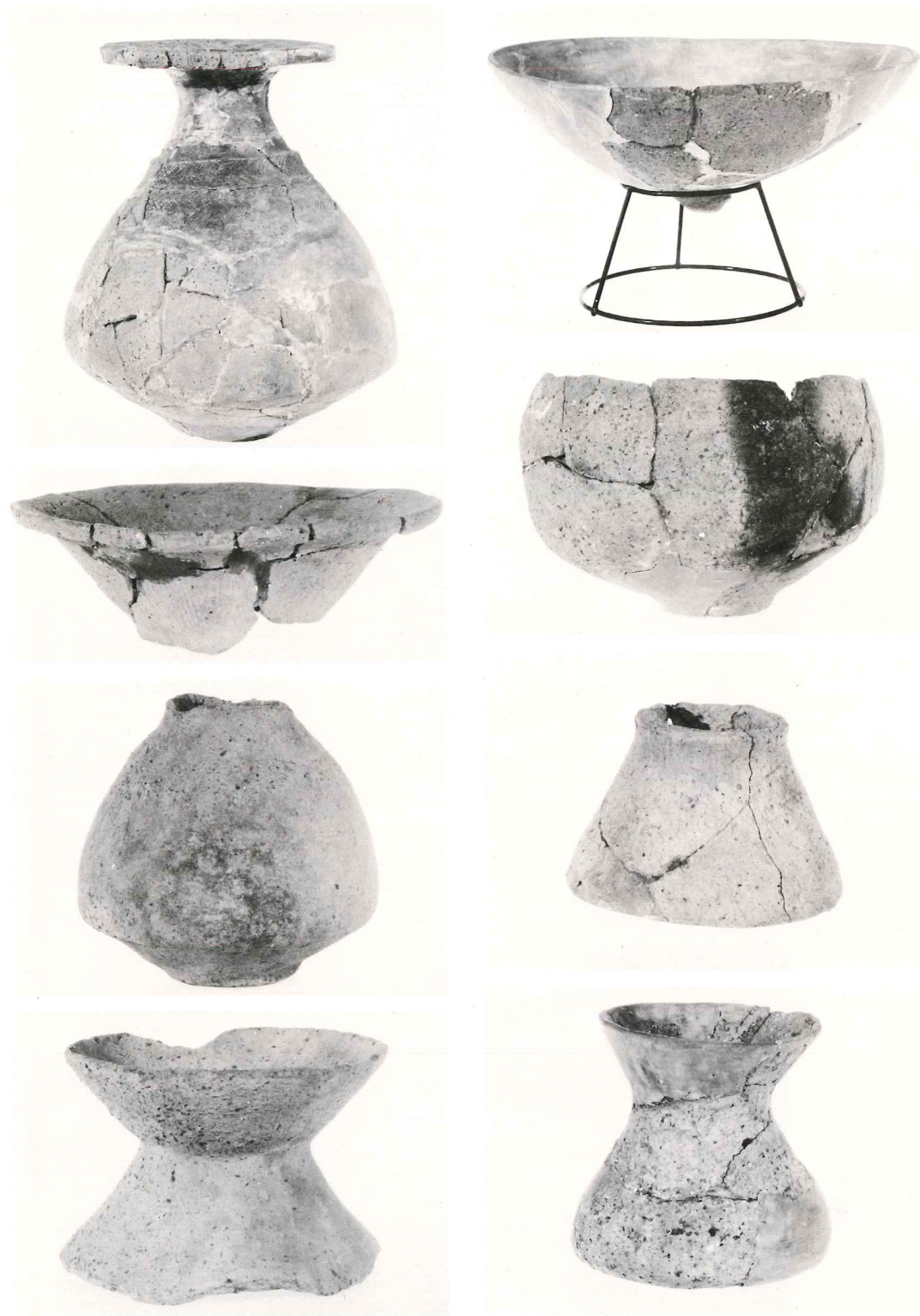
(A)西側のカッティングに
見える溝跡



(B)C地区トレンチ
設定状況



(C)15トレンチ南側
セクションの溝跡



出土土器
(左上よりNo.5、10、11、14、15、22、36、37の順)



出土土器
(左上よりNo.38、43、47、48、51、53、56、58、63の順)

袋井市一色前田遺跡

1981年 3月31日

編集・発行 袋井市教育委員会

印刷所 株式会社 開明堂